

# トロイヤーシトレンジ台タンカンを連年安定生産するための適正着果量

樹冠容積当たり15個/m<sup>3</sup>の着果で、葉果比を約150とすることで、隔年結果が軽減され、L、2L級果の割合も高くなる

## 背景・目的

- ・県本土、熊毛地域の産地において、落葉が軽減できるトロイヤーシトレンジ台タンカンを導入
- ・連年安定生産に適した樹冠容積当たりの着果量の把握が必要

## 成果の内容

- ・着果程度を樹冠容積当たり15個（以下15個/m<sup>3</sup>）とした樹は、3年間連続して同程度の樹冠容積当たりの収量を維持
- ・葉果比は、着果程度を15個/m<sup>3</sup>とした樹で156となり、隔年結果指数は、20個/m<sup>3</sup>に比べ小さくなり、隔年結果が軽減
- ・収穫果実のL級果及び2L級果の比率は、20個/m<sup>3</sup>と比べ高い

表1 トロイヤーシトレンジ台タンカンの着果程度の違いが収量・階級構成に及ぼす影響

着果程度	樹冠容積 (m <sup>3</sup> )	樹冠容積あたりの			隔年結果 指数	葉果比	階級構成 L+2L (%)			
		着果数 (個/m <sup>3</sup> )						収量 (kg/m <sup>3</sup> )		
		R元	R2	R3	R元	R2	R3			
15個/m <sup>3</sup>	18.7	15.0	15.0	15.0	2.4	2.5	2.8	0.04	156	76.6
20個/m <sup>3</sup>	17.2	20.0	8.0	20.0	3.4	1.7	3.0	0.31	109	62.3

注1) 樹冠容積、樹冠容積当たりの収量、階級構成は令和元年～3年の平均値、葉果比は令和3年の値

2) 樹冠容積は、令和3年に7かけ法（樹高×長径×短径×0.7）で算出

3) 隔年結果指数は、|前年度の収量-本年度の収量| / (前年度の収量+本年度の収量)、数値が大きいほど変動が大きいことを示す。



15個/m<sup>3</sup>（次年度も安定して着果）



20個/m<sup>3</sup>（隔年結果のため少着果）

試験開始2年目における収穫時（樹齢：13年生）の着果状況（令和3年2月2日撮影）

## 期待される効果

摘果時における適正着果量の指標として活用



トロイヤーシトレンジ台タンカンの大玉果実・連年安定生産



○普及対象・範囲：タンカン産地の果樹技術員

鹿児島県農業開発総合センター  
果樹・花き部常緑果樹研究室

(R04)